

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

留学体験記： フィレンツェ・ミラノ

## \* イタリア滞在での雑感、あるいは実感 \*

前田 裕也

僕のイタリア滞在は Firenze から始まりましたが、事前準備として日本イタリア京都会館で1年ほどイタリア語を勉強していました。

まず Roma に到着し、そこから滞在する Firenze へと向かう電車の座席で、イタリア人の家族に囲まれる格好になったので、さっそくイタリア語で会話してみようと思い、きっかけを見つけて話しかけてみました。しかし、言葉がぜんぜん出てこない！こうなることは日本にいる時からなんとなく分かっていたけれど、こんなにも話せないのはマズいなど痛感... それでも、語学学校の Linguaviva の授業が始まってからは、日本で勉強していた甲斐もあり、文法はなんとか理解でき、(会話はすぐには慣れないもんだと割り切って)とりあえず一安心。

僕のイタリア滞在の目的の一つにイラストの勉強があり、時間がある時はしょっちゅう絵を描いていたので、それがコミュニケーション・ツールとして大いに役立ちました。

絵画工房に見学に行った際に、イラストと粘土で作ったサイの作品の写真を持参していたので、それを Maestro の Francesca に見てもらっていると、そこに居られた別の生徒の方が「その粘土のサイ、私が通っている別の陶芸工房の先生もきつと気に入るから、そちらにも見学にいらっしやい」と言ってくれた。そこで、後日、作品を持って陶芸工房にお邪魔することに。その粘土の作品を見た Maestro の Enzo はとても気に入ってくれたみたいで、「僕の作ったウサギの陶器に君が着色するの

はどうだい」と提案してくれました。それから計7回ほどその陶芸工房に通わせてもらい、ウサギが完成してからは、絵の勉強をするために数ヶ月間、前記の絵画工房へ通わせてもらいました。こうした交流の中で自然と身についていく語学もあれば、うまく伝えられないことや向こうの言っていることのニュアンスがつかめなかつたりで、それがまた語学の勉強への励みにもなりました。人体の解剖書(絵画用の)なんかも、辞書を片手に読んでいると(これは結構な苦痛であるのだけれど)、専門的な言葉も当然出てくるのですが、中には日常で使える言葉が出てくるので、学校の授業にも良い影響があり、勉強も楽しくなってきました。(もちろん、気が緩んでダラけてしまったり、少し嫌になったりすることもあったりだけれど。)イタリア語学習の動機のひとつに、翻訳のコンテストに参加するというものもあり、実際、日本に戻ってからコンテストに参加しました。



【Maestro Enzo とのコラボ作品】

Firenze での滞在が約7ヶ月間で、それらか Milano にある Linguadue に転校し、新しい生活を始めました。

Firenze の人からは「Milano は brutta な街」だと散々冷やかされたり、Firenze を出発する前に仲良くなった友達と離れてしまうのを思って不安な気持ちになったりで、実際、最初のうちは慣れない新しい家や知らない街がしんどくて辛かったけれど、Milano の気候が良くなってく頃には街の良さも分かってきて、Milano に来て良かったと感じるようになりました。



【クラスメイト】

学校に関しては、授業の構成が多少違いました。個人的には Milano 校の授業の方がコミュニケーションを伸ばすには向いていると感じました。と言うのも Firenze 校は先生主体で文法中心の授業であるのに対し Milano 校は生徒主体の授業で、例えば、各々が関心のあることを発表しましょうと先生が言って、一人ずつみんなの前で10分程度のプレゼンテーションをして、その後、他の生徒との質疑応答があったり、ペアを作って、ある状況をどう解決するかを話しながら台詞を用意して、それを暗記して芝居風(?)に発表したり、グループ・ディスカッションなんかも多くて、とても良かったです。

Milano では様々な Fiera と呼ばれる見本市があり、特に Salone と呼ばれる家具の見本市の時期には街のいたるところで面白いディスプレイやイベントがあり、興味深いものでした。他にもイタリア人の画家ではないですが、モネ展では画集では分からなかったモネの良さに気づいたり、マグリッド展が開催されたりで、Firenze にはあまりな

い近代以降の美術展も頻繁に行われていました。

美術史や西洋の宗教に関する知識があまりなかった僕は、どうしても近代以降のほうが楽しく思っていたのですが、それでも、バロック絵画の先駆とも言われる画家 Caravaggio の絵には非常に感銘を受けました、イラストにまで影響が出てしまいうくらいに。

ある日、学校の先生が、小規模な絵本の見本市があると教えてくれたので、会場へ行ってみると、団体の小学生と引率の先生を発見。「僕のイラストに対する子どもたちの反応を知りたいので、彼らに見せたいのですが、いいですか？」と先生に尋ねてみると快諾してくれたので、持ってきた数冊のうちの一冊のスケッチブックを子どもたちに向けて広げ、「この生き物はなにに見えますか？みんなで名前をつけてみよう！」なんて質問。子どもたちは相談しあって、名前(造語的な)をつけてくれました。他の抽象的なイラストなんかも概ね好評で、その中で日本の子どもたちとは反応の順番が少し違うことにも気づきました。イタリアの子どもたちは、絵に対してまずは、「きれい」、「すごい」、「かっこいい」という反応で、対して日本の子どもたちは(イタリアに行く前に一度、日本の子どもたちにも絵を見せたことがあったのですが、)これなに？なんで？と疑問を投げかける子が多く、反応の違いは美術や芸術に対する環境が影響しているのかなと思いました。(イタリアの街には美術館はもちろん、画廊やアトリエが多く、路上で絵を売っていたりもしますし、どの家にも絵がいくつも飾ってあり、美術というものが本当に日常的に、身近にあります。)



【プロミス】

子どもたちに他のスケッチブックの絵を見せている時に、少し前に作っていた TV タレントの山田五郎氏に関するイラストのポストカードがバラバラと手元からこぼれてしまいました。もの欲しそうにしている子どもたちに配ることにしたのですが、山田氏のポストカードが人数分はなかったので、別に作っていた抽象的な人間のイラストのポストカードを配ってあげると、先に山田氏のポストカードを受け取っていた大勢の子どもも「あっちの方が良い」と言いだして交換を迫られ、山田氏のイラストが返却されてしまったのがとても印象的でした(笑)。

この経験と印象はきっと今後のイラストに良い影響を及ぼしてくれると感じました。



【フィレンツェ郊外への遠足】

滞在の終盤は予定よりも早めに学校を切り上げて(その分の授業料は切り上げた時点から一年間は有効なので、期限内にまたイタリアに戻る予定です)、残りのイタリア生活はのんびり過ごそうと思ったのですが、結局ダラダラと荷造りしてるうちに『最後の晚餐』さえ見ることなく Milano を出発することに...。帰国の便も Roma 発だったので、Roma 観光をすることにしました。

Borghese 美術館の Caravaggio と Bernini には感動。Bernini の彫刻の素晴らしさは写実性よりもその構成力にあるんだろうと感じた。そんなわけで Roma の美術館や教会もやはり面白かったけれど、特に印象に残ったのは「動物園」でした。檻

や動物の住居のレイアウトなんかはその動物に合わせてあるので不自然さがないし、なんと孔雀が放し飼い！孔雀が歩く速度に合わせて、しばらく一緒に散歩していると、お孫さんを連れていたおじいさんに「きみの孔雀かい？」なんて、声をかけられました(笑)。

でも Roma の動物園だけじゃなくて Milano の動物博物館も同じで、単に動物の剥製をショーケースにディスプレイするだけでなく、動物ごとにある場面を再現していて、例えば熊の展示なら、雪の積もった景色の中で熊が鮭を獲っている場面、象が行水している場面等々、リアルに展開されていて感心しました。あと Torino のエジプト博物館の彫像の間の空間構成は本当に鳥肌が立ち、痺れるような感覚を味わいました。このような感覚は文字や言葉ではなかなか真には伝えられませんが、それまで体感したことのないものでした。

これらは今後、僕が作っていく作品の空間を構成する際にもヒントに成り得るもので、イタリアにはいたるところに想像力を喚起する種子があり、そうやって喚起された想像力がまた次の想像力を生むような良いサイクルができていくんだなと実感しました。

それから、日本の生活圏内では知り合えないようないろんな人と知り合えたこと、色んな人にお世話になったことも良い思い出で、次に予定しているイタリア滞在の際には、イタリアで感じたことと帰国以後の活動とをきっかけに、また新しい出会いを見つけたいと思っています。

日本で出来ることをやって、また早くイタリアに帰れる日を待ち望んでいます。

(語学講座受講生)

イタリア発月刊日本語新聞

**COMEVA?**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

お問い合わせ等は NIPPON CLUB SNC 宛てにお送り下さい。

## VIVA IL CINEMA ITALIANO !

### 第21回『湖のほとりで』

#### *La ragazza del lago*

松島 征

今回は、アンドレア・モライヨーリ Andrea Molaioli 監督作品『湖のほとりで』*La ragazza del lago* (2007) を取り上げます。昨年の夏、梅田駅の近くの映画館でこの映画を見て感動し、いずれはこのコラムで紹介するつもりでいたところ、日本イタリア京都会館のご厚意でこの映画の DVD を貸していただき、時間をかけて細部までゆっくり鑑賞することができました。やはり、いい映画は何度も見るべきである、ということを改めて痛感した次第です。よほど超人的な記憶力の持ち主でない限り、見てから何ヶ月も経てば、映画の本筋は記憶していても、その細部は記憶から脱落してしまいます。映画は画面の流れによって構成されていますから、とくに映画館で見ている場合は、あともどりが利きません。書物の場合とちがい、頁を繰って以前に表現されていたことを確認することはできない。多くの作品には、映画監督が観客に目配せをするような、事件の前触れや伏線などを示す意図的・暗示的なシーンがあるものですが、スクリーンを眺めていると、眼前に起きるできごとに気を取られて、そんなシーンがあったことを忘れがちです。その点、DVD や VHS で見ている場合は、あともどりをして前のシーンを確認することができます。今回も DVD のおかげでずいぶん助かりました。

映画の原作は、ノルウエーのミステリー作家、カリン・フォッスム Karin Fossum の小説『見知らぬ男の視線』です(イタリア語のタイトルは、*Lo sguardo di uno sconosciuto*)。小説の舞台はノルウエーのフィヨルド地方ですが、モライヨーリ監督は、それを北イタリアのフリウリ=ヴェネツィア・ジュリア地方に移し替えて撮影しました。画面からは、北欧の湖のもつ神秘的な雰囲気がにじみ出ていると、原作者も喜んでるのだそうです。

この作品は、アンドレア・モライヨーリ監督(1967

年、ローマ生まれ)の長編デビュー作です。彼は、イタリア喜劇を代表する巨匠ナンニ・モレッティ Nanni Moretti 監督の下で、長期間にわたり、『赤いシュート』『親愛なる日記』『息子の部屋』などの作品の助監督を務めてきました。『湖のほとりで』は、ヴェネツィア映画祭(2007 年度)に出展され批評家週間賞を受賞、さらにはダヴィッド・ドナテッロ賞(イタリアのアカデミー賞と云われている)の主要10部門を受賞した傑作です。いつものように粗筋を述べながら、簡単なコメントをつけます。



「湖のほとりで」

- 1) 映画の舞台は、北イタリアの小さな村。小学生のマルタが帰宅の途中で連絡を絶つ。母親たちが心配して警察に通報。その日のうちに警察の車に保護される。マルタは村はずれに住むマリオという、ちょっとオツムが弱いが子供好きの男に誘われて、いっしょに湖に行き不思議なものを見たと報告する。[映画の観客はこの導入部において、鮮やかに意表をつかれます。イタリア語の原題が『湖の娘』ですから、小学生のマルタが事件の被害者かと思わせながら、それをいったんはぐらかし、この失踪事件の背後にさらに重要な事件が発生することをほのめかしているのです。また、フランス民話の「赤頭巾とオオカミ」を連想させるような場面もあります。トイレのドアを開けたままマルタが用を足しているところを、マリオが執拗に眺めるシーンなど。]
- 2) 「湖の主の蛇に魔法をかけられた人が永遠に眠っている」というマルタの話聞いて、サンツィオ刑事たちが湖のほとりに行ってみると、そこには美しい娘の裸体が男物のコートをかぶって転がっていた。
- 3) 殺人事件としての捜査が始まる。捜査の指揮を執るのは殺人課のベテラン、サンツィオ刑事。彼はまた、精神病院に入院中の妻からの手紙を読

んで心理的に動揺している。[サンツィオを演じる俳優トニ・セルヴィッロの疲れきった表情には、仕事上の不首尾、家庭内の悩み事が見事に表現されています。]

4) サンツィオ刑事が最初に疑ったのは、被害者アンナの恋人と称するロベルトであった。アンナの脳の障害を証明する医師の診断書を彼が隠し持っていたばかりでなく、アンナが殺された当日持ち歩いていたデイパックがロベルトの隠し場所にあったからである。ロベルトが逃げ出したので、警部は彼の逮捕を指示する。

5) 最初に殺害現場を目撃したマリオは、車椅子に乗った父親と村はずれの農場で暮らしている。「健康なアンナのことを父親は憎んでいた」とマリオが証言。[この憎まれ役の父親を、かつての名優オメロ・アントヌッチが演じていました。タヴィアーニ兄弟の名作『パードレ・ノドローネ』において、彼自身が演じた凶暴な独裁者の父親役を彷彿とさせるどころがあり、きわめて興味深い。]

6) アンナの父親は、姉のシルヴィアには無関心で、妹のアンナを溺愛していたが、彼女が余命いくばくもないということを知られずにいた。

7) アンナは生前、アンジェロという三歳児のベビーシッターをしていた。「天使」という名のその子は、名前にそぐわぬ手に負えない障害児であったが、アンナにはよくなっていた。ある朝、その子が不慮の事故で死んでしまった。アンナの父によると、彼女は悲しみに1週間泣いていたとのこと。息子の死が原因でアンジェロの両親は離婚し、同じ村に別々に暮らしている。

8) サンツィオ刑事自身も家庭内に問題をかかえている。妻は若年性の認知症で入院中。自分の夫の見分けがつかない。そのことを娘のフランチェスカに内緒にしているので、親子関係がぎくしゃくしている。[ベテラン俳優トニ・セルヴィッロのいぶし銀のような演技]

9) 結局、犯人は容疑者のロベルトではなく、別の人物であった。アンナにとってアンジェロの死がよほどこたえたのか、それとも不治の病のためみずから命を絶とうとしたのか、そのあたりは謎である。[いちおうミステリー仕立ての作品ですから、ここで犯人の名を明かすなどという野暮なことはしないでおきましょう。]

10) 一件落着ののち、サンツィオ刑事は娘のフラ

ンチェスカと連れだって、入院中の妻を訪問する。彼女はあいかわらず、自分の夫と娘を認知できない。娘の前に一瞬立ち止まって笑顔を向けるだけであった。[父と娘の関係が修復されたことを示す優れたショット]



「サンツィオ刑事とその妻」

この映画は、だいぶ前にご紹介した『エボリ』*Cristo si è fermato a Eboli*(フランチェスコ・ロージ監督)と同様に、あまりイタリア映画らしさを感じさせない作品です。サンツィオ刑事の事件捜査のプロセスがゆっくりとしたテンポで淡々と描かれています。そのことは、原作がノルウェーのミステリー小説であることと無縁ではないでしょう。この映画には、ハリウッド映画が売りものとしているスリルもサスペンスもない。激しい口論や感情的な葛藤もほとんどなく、ヴァイオレンスの場面もありません。登場人物たちの会話も抑制が利いていて無駄がない。人間たちが寡黙である代わりに、風景・人物の表情・いろんなアクセサリ類が「映像記号」として雄弁に語りかけてきます。画面の展開を追っているわたしたちの心に「静かな感動」でも呼ぶべきものが、ジワジワと忍びよってくるのはそのためです。この作品は、第二次世界大戦後のイタリア映画の特徴といわれた「ネオ・レアリズモ」の成果を立派に継承するものです。

この作品の本当の主題は、寒村における殺人事件とその犯人探しというミステリーよりも、五組の親子関係の葛藤の方にある、というべきでしょう。サンツィオ刑事とその娘とのぎくしゃくした関係、知的障害者マリオとその偏屈な父親との関係、被害者のアンナとその父親との奇妙な愛情関係、三歳で不慮の死を遂げたアンジェロ(障害児)とその両親との関係、そしてぐうたら息子ロベルトとその母親との関係という五態がそうです。そのような

家族関係の困難さ・複雑さは、ノルウェーのような北国にあっても、イタリアのような南国にあっても、本質的には変わらないものでしょう。いや、われわれの住む極東の島国(あるいは「日の出づる国」)にあっても、人間関係の深刻さに変わりはありません。

このエッセーの初めの方で、物語の原作者(女性)が「北欧の湖のもつ神秘的な雰囲気が画面からにじみ出ている」ことに喜んで、と書きました。映画館で入手したプログラムに載っている監督のインタビューによると、原作者の彼女は最初、映画には地中海的な舞台が選ばれて、大いに海が登場したり、マンドリンやピッツアが出てくることを予想していたとのこと。けれども出来上がった映画を実際に見て、地形的に、形態的にノルウェーに近い場所が選ばれているのを目にして驚きかつ喜んだ、とあります。たとえ、ヨーロッパの北

と南に遠く離れていても、優れた感性と知性は共鳴する、ということでしょうか。



「認知症の母に笑いかける娘」

(京都大学名誉教授・フランス文学)

## … 会館 だ よ り …

### カラヴァッジョが見た夢

1610年38歳の若さでこの世を去ったミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ。今年は没後400年に当たります。ミラノの片田舎に生まれた青年が挑んだものは、ルネサンスまで続いた古典主義絵画との決別であり、伝統の破壊でした。

本セミナーでは、カラヴァッジョ研究の第一人者・神戸大学大学院准教授の宮下規久朗先生に、彼の生涯を追いながら、その作品から読み取れる彼の思い描いた『夢』に迫っていただきます。

講師：宮下規久朗(神戸大学大学院准教授)

日時：4/3,4/17,5/29,6/5,6/19,6/26(土)

(6/26は食事会を予定)

全6回(※6回トータルでのお申込)

いずれも18:00~20:00

参加費：21,000円(一般・受講生)

20,000円(個人維持会員)

会場：日本イタリア京都会館 本校

### イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田：大阪駅前第4ビル

4/4(日) 13:00~14:30

4/4(日) 15:00~16:30

4/5(月) 13:00~14:30

4/7(水) 19:00~20:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

4/5(月) 19:00~20:30

● 京都本校：日本イタリア京都会館

4/3(土) 11:00~12:30

4/3(土) 13:00~14:30

4/7(水) 11:00~12:30

### スペイン語 無料体験レッスン

4月より開講の春期スペイン語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

日時：4/7(水) 19:00~20:30

会場：日本イタリア京都会館 本校

講師：当館スペイン語講師

### ポルトガル語 無料体験レッスン

4月より開講の春期ポルトガル語講座に向けて、体験レッスンを開催。入門者向け。事前予約制。

日時：4/6(火) 19:00~20:30

会場：日本イタリア京都会館 本校

講師：当館ポルトガル語講師



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: http://italiakaikan.jp/